巻頭言

以前，友人との会話の中で，織り姫星（ベガ）と海王星とどっちが我々に近いと思うかと，問いかけたことがあった．なんでそんな話になったのかはよく覚えていないが，明らかなことがらを強調するためのたとえのつもりだったような気がする．ともかくそう聞いた．すると彼は，「そりゃ，織り姫星だろう．」と言う．予想外の答えに，僕はまた問う．なぜそう思うか．彼曰く，「だって織り姫星は見たことがあるけど，海王星は見たことがない．そんなに暗いのは，遠いからだろ？」彼は昔から理科が嫌いで関心もない人だが，論理的に考えられる人である．僕は感心し，次の言葉につまった．

私たちの直感は，私達の経験に基づいている．深く考察せず，軽い労力で物事を理解したつもりになるには直感は便利であり，実際，日々の生活を送る上ではそれで十分なことが多い．しかし，惑星に関わることがらは私たちの日常とは大いに異なる現象であり，直感はなかなかうまく働かない．暗いから遠いとは限らない．探査機や望遠鏡で写真を撮って「見る」ことが出来たとしても，その現象を直感的に理解できるとも限らない．当たり前のことだが，現象の本質を正しく理解しようとしたら，いろいろな視点から多くの観測データをとって注意深く調べ，すべての観測データを合理的に解釈できるような理解にまでいたる必要がある．一方で，対象が複雑な現象であればあるほど，観測データそのものも，複数の観測データ間の関係も複雑になり，謎解きが難しくなっていく．このあたりが，この科学の難しいところであり，面白いところでもあるのだろう．なぜだかわからないが，この頃，改めてこのようなことを感じている．

友人との会話はその後，星までの距離について僕が説明する流れになったのだが，彼が余り関心を示さなかったので，ちゃんと理解してもらうことはできなかった．ところで，できることならこうした人々にも，星までの距離を求めること，科学することの意義を理解してもらい，応援してもらえることが望ましい．それにはどうしたらよいか．これはまた，難しい問題である．あるいは，おもしろい問題でもあるのかも知れないけれど．

中本 泰史（東京工業大学）